ヨハネによる福音書 21 章 20〜25 節

はじめに

・1 章の初めに戻って 学びを順に進める前に、いま一度、前置きの学びを差し挟むのをお許しいただければと思います。「ヨハネによる福音書」は元来、20 章で終わっていたと考えるのが定説になっているためです。20 章の終わりの 2 節（30、31 節）には、文字どおり、福音書を閉じる「あとがき」のような言葉が記されています。つまり、元々はここで終わっていた福音書に、後年、最終の編集者が補遺のような形で 21 章を加えたということです。ですので、追加部分の 21 章を先に読み通し、その後で改めて 初めの 1 章に戻って、学びを順に進めるようにしたいと思います。そのようにして、補遺を済ませて後に初めから順を追って見ていくとき、福音書全体のトーンをよりさやかに感じ取れるように思われます。

・なお、21 章の学びも 3 回に分け、かつ いわば逆引き的に終わりから初めに戻るようにして進めたいと考えています。これも普通の仕方とは異なりますが、そうすることで、前後の文脈の全体に目をやることが容易になることがあります。そして、時に見過ごすことのある出来事の流れの連続性とそこに置かれたメッセージの核心に気づかされることが少なくありません。

締め括り①：福音書編纂の経緯をめぐって

・そもそも、誰がこの福音書をまとめたのでしょうか。24 節を見ますと、次のように書かれています。

「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、<u>この弟子</u>である」（24）

・「この弟子」というのは初めの 20 節に記されている弟子、つまり「イエスの愛しておられた弟子」（20）です。そして、これは普通、イエス・キリストの 12 弟子のうちの一人の「ヨハネ」を意味していると考えられています。

20 節の続きを見ると、こうあります。「この弟子は、あの夕食のとき（「最後の晩餐」のとき）、イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、裏切るのはだれですか』と言った人である」。「最後の晩餐」という決定的な時にその場にいて、しかも イエス様のすぐ傍らで、その胸元に寄りかかったまま そんなことを尋ねるのですから、「どこか特別な弟子にちがいない」と考え、12 弟子の一人のヨハネということが出てくるわけです。

これだけでもありません。この「イエスの愛しておられた弟子」というのは、ヨハネの福音書の中ではいつも、リーダー格のペトロと一緒のところで登場しています（13：21〜30、20：1〜10、21：1〜14、21：20〜23）。やはり、弟子たちの中でもどこか重要な人物だったことが想像されます。

・けれども、その名前が最後まで明らかにされないまま、福音書は閉じられています。

・しかも、もう一つ不思議なことにも気づかされます。それは、ヨハネの福音書にはほかの弟子たちの名前はそれなりに書かれていてそこに出てくるのに、よりによって 当のヨハネの名前だけがどこにも見当たらないことです。

・それだけではありません。私たちの頭を混乱させることがまだあります。24 節の後半で突然、次のように言われていることです。「わたしたちは、彼の（前述のヨハネの、ということです）証しが真実であることを知っている」。イエスの愛しておられた弟子のヨハネが福音書を書いたと思いきや、「この私たちはそのヨハネの言葉が真実なことを知っている」と、ここでは 当のヨハネではない別人が文章を書いていることが分かります。しかも、「私たちは」というのですから、一人でなくて複数の人たちです。いったい、どうなっているのでしょうか。

・ちなみに、今月の「最後の 21 章」が書き加えられたとき、一般的には、ヨハネはそのときすでに天に召されていたと考えられています。22 節で、主イエスがペトロにこう言っておられるからです。「わたしの来るときまで（すなわち、イエス様が天に戻って後（のち）、もう一度やってくるその時まで）、彼が（つまり、イエス様の愛しておられた弟子のヨハネがまだ）生きていることを、この自分が望んだとしても・・・」。主イエスがこんなふうにおっしゃられたため、「それで」23 節の「うわさ」になったというのです。「それで、この弟子のヨハネは死なないという（イエス様の真意とは違った、誤解の）うわさが兄弟たちの間に（すなわち、諸教会の間に）広まってしまった」と。ところが、そのヨハネがなんと召されてしまいます。そうなると、いろんなことが言われ始めます。「ヨハネ先生が生きておられる間に、イエス様は来られるはずじゃなかったのか。イエス様の言葉もやっぱり、あんまり信頼できないってことか？」などと、いろんなことが。そこで、そうした噂（うわさ）を正すためにも今月の箇所がここに補われたというわけです。23 節を見ると、そのことがはっきりと書かれています。「イエスは、彼は死なないと言われたのではない」。「イエス様が言われたのは『仮にそう願ったとしても』ということであって、そんなことを言おうとされたのではないんだ」と、「但し書き」が加えられています。ですから、ここでは、ヨハネがすでに召されていることが前提になっていると考えられます。

・いずれにしても、何より重要なのは、福音書に記されていることのどれもが、24 節で二度 繰り返されているように、弟子のヨハネのその「証し」に基づいているということです。証しというのは「証言」ということですから、それは 実際に見たり聞いたりした「事実」によっているということです。だとしたら、そこには確かな保証があり、権威とでも呼べるような「厳かなもの」が生まれてくるのではないでしょうか。

・少しばかり面倒な話になりましたが、というようなあれこれから、「ヨハネによる福音書」の執筆・編集に関して、その成り立ちや経緯を皆さんはどのように想像されるでしょうか。頭の体操も兼ね、イマジネーションをフルに働かせて推測してみていただけたらと思います。（この点については、去る 4 月に掲載の「はじめに」所収「『ヨハネによる福音書』を読む前に」が参考になるかと思います。御参照ください）

・そのようにして ヨハネ福音書編纂の経緯を知ったとき、私たちはそこでどんな思いにさせられるでしょうか。「この弟子」について、また編纂に携わった人々について、そして今 福音書を手にしているこの私たちについて・・・。それより何より、それはそもそも何のためにまとめられたのか、そして 私たちはそれにどのように向き合うのか・・・ということについて。

締め括り②：その出来事をめぐって

・次に、何より大切な内容の問題に目を移したいと思います。私たちに語りかけるメッセージの内容として、今月の中心に置かれているのははたして、どんなことなのでしょうか。それは、22 節の次の言葉に約言されているように思われます。

「あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい」（22）

・「人は関係ない。あなたは、わたしに従いなさい」という呼びかけの言葉、招きの言葉です。

・ただ、そもそもなんで そのようなことがペトロに向かって言われたのか、とお思いになられないでしょうか。と思って、聖書をよく見てみると、20 節にこう書かれています。

「ペトロが振り向くと・・・」（20）

・「当のペトロが振り向いたからだ」というのです。

弟子たちは今月に先立つところ（21：1～14）で、みんなして イエス様に朝食をふるまってもらいました。

その後（あと）、ペトロはおそらく、イエス様と語り合いながら、ふたりで湖の岸辺を歩いていたのではないでしょうか。と そのとき、誰かが後ろからついてくるのを感じた。それで振り返ってみると、

「イエスの愛しておられた弟子」がそこにいたというわけです。ヨハネはふたりの会話に入れてもらいたかったのかもしれません。だから、ふたりの後(あと)についてきた。ところが、問題は、それを見たペトロがイエス様にこう尋ねたことでした。

「主よ、この人はどうなるのでしょうか」(21)

・要するに、ペトロはいったい何が気になって、こんなことを聞いたのだろうか、ということです。

・こんなふうに言う人もいます。「ペトロも今や、もう一度、リーダーとしての務めに回復された。だから 早速、他の弟子たちに心配りを始めたのではなかろうか」。そう想像して、ペトロが尋ねたのはヨハネの将来を気にかけてのことではなかったかと述べています。

・その他の可能性も含めて、皆さんはどう思われるでしょうか。このことは、今月の箇所を的確に読み解くかぎになるように思われます。

・ちなみに、このところの二人のやり取りは、日本語の聖書（新共同訳聖書）では「主よ、この人はどうなるのでしょうか」「(それが) あなたに何の関係があるか」となっていますが、元のギリシア語を 語順もそのままに直訳すると、こんなふうに言っているのです。「主よ、これは でも 何？(*κύριε, οὗτος δὲ τί;*)」「何、あなたに？ (*τί πρὸς σέ;*)」。英語にすると、"Lord, this but what?" "what to you?" です。ただそれだけの言葉でしか 会話が交わされていません。

・とりわけ、イエス様の返答は極めて直截(ちょくせつ)にして、明快かつ断定的です。直後の一言(ひとこと)まで続けると、

「あなたに何の関係があるか。あなたは、わたしに従いなさい」(22)

と言い切っておられます。

ギリシア語の原文では、"*τί πρὸς σέ; σύ μοι ἀκολούθει.*" 日本語の直訳では、「何　あなたに？ (what to you?)　あなたは　私に　従いなさい (you follow me) 」となります。皆さんの印象はいかがでしょうか。全体のトーンと、そこでなにがしか強調されていることがありはしないか。やり取りの現場を想い描いて、想像してみてください。(この点については、BFC「聖書読解余滴」に掲載の「優しさの奥行き（一)」で詳細を扱っています。あわせて御覧ください)

・イエス・キリストはなぜ、このような物言いをされたのでしょうか。そこに、イエス様のどんな思いが隠されているのでしょうか。そのことがどうやら、ペトロに対する、またこの私たちに対するこの箇所の最大の問いかけであり、何より大切なメッセージのように思われます。

・もしそこに、通常の思いを超えた真理があるとしたら、私たちはイエス・キリストの物言いを正面から受け止め、求められる深さでそれを聴き取らねばならないのではないでしょうか。

〔参考〕ヨハネがペトロに劣等感を？

・一説では、福音書の編纂に着手したヨハネ自身が実は ペトロに劣等感を感じていたのかも・・・と言われてもいます。

・どういうことかというと、いつも一緒に出てくるペトロのほうはローマで殉教の死を遂げます（紀元 60 年代のこと、あの悪名(あくめい)高い皇帝ネロの迫害によって)。それはある意味で、光栄ある「名誉の

死」でした。ところが、これに対し、ヨハネのほうは殉教せずに長生きをしたと伝えられています。ですから、ペトロの殉教の後(あと)、諸教会の間で次のような比較が始まった。「ペトロは光栄ある殉教の死を遂げたのに、それに比べて ヨハネのほうはといえば、言ってみれば『より安楽な道』に進んだ」という、ふたりの間の「優劣」を比べる比較です。そうした風潮に、ヨハネの教会は悩まされ、もしかすると、当のヨハネ自身もどこかで ペトロに対する劣等感を感じていたかもしれない、という推測です。

・だから、「ペトロにはペトロの進む道というのがあるのだ。それは、イエスの愛しておられた弟子・ヨハネの進む道とは違っている。それらは関係のないことで、お互いそれぞれに託された道を歩めばいいのだ」と語ってくれたイエス様のお言葉を、後(のち)に改めて書き添えたというわけです。

・もしも推測のとおりだとしたら、イエス・キリストの言葉はペトロとヨハネそれぞれの内にどんな思いを引き起こしたでしょうか。また、ヨハネの教会にどんな変化を引き起こしたでしょうか。そして、この私たちの内に何をもたらすでしょうか。

締め括り③：その言葉をめぐって

・「ヨハネによる福音書」はここに至り、補遺を含むその全体が次のような言葉で閉じられています。

「イエスのなさったことは、このほかにも、まだたくさんある。<u>わたしは</u>思う。
その一つ一つを書くならば、世界もその書かれた書物を収めきれないであろう」(25)

・「わたしは思う」と、また突然「わたしは」との言葉が出てきますが、これはおそらくは 編集の最終段階での代表者と考えられます。

・いずれにせよ、福音書をまとめたヨハネとその教会が言いたかったのはいったい、何なのでしょうか。真実豊かな何かを、彼らは知っていた。だからこそ、彼らは思いのすべてを込めて 福音書をま

とめたのだろうと思います。その本意を見過ごすことなく きちんと受け止めて初めて、そこに記されている言葉を「本当に読む」ということが始まるのではないでしょうか。そうして初めて、そこに盛られている喜ばしい宝物を見ることができるように思います。